

◎ 「楽焼とスリップウェア」展によせて

益子陶芸美術館 学芸員 松崎 裕子

はじめに

益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子は1993年、栃木県南東部に位置する益子町の中心、城跡のある小高い丘に開館しました。以来、濱田庄司(1894～1978)、島岡達三(1919～2007)、加守田章二(1933～1983)など益子の近現代陶芸を築いた作家たちの作品を中心に収集・展示するとともに、濱田庄司と交流のあったイギリス人陶芸家バーナード・リーチ(1887～1979)をはじめ、欧米の現代陶芸作品もコレクションの柱として収集し、紹介しています。近年は、うつわの表現を軸とした現代陶芸、また染織やガラスなど工芸の分野を広く視野に入れ、年3～4回の企画展を開催しています。美術館事業と並行して、2014年からは「益子国際工芸交流事業」と称したアーティスト・イン・レジデンス事業を開始し、旧濱田庄司邸に隣接する工房と交流館を基点に、作家の滞在制作事業を行っています。

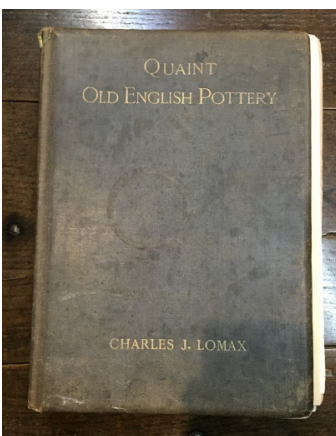
開館25周年を迎えた2018年は、民藝運動の支援者として名高い山本爲三郎氏の暮らしを彩った濱田庄司のうつわ(アサヒビール大山崎山荘美術館コレクション)や、益子と笠間(茨城県)の現役作家約60名による日常のうつわなど、〈テーブルウェア〉を基調とした展覧会が続きました。2018年度最後の展示として、現在、当館コレクションを中心とした所蔵企画展「楽焼とスリップウェア」展を開催しています。

スリップウェアの受容と展開

一般にスリップウェア(slipware)とは、クリーム状の化粧土である泥漿(＝スリップ)で加飾し、主に鉛釉を掛けて焼成した陶器のことで、古代メソポタミア以来各地で広範に作られてきましたが、特にイギリスをはじめヨーロッパを中心に発達しました。近年、日本国内では、主に17～18世紀のイギリスに起源を持つスリップウェアが高い人気を見せるとともに、作り手と使い手の双方の間で、いわば一つの「ジャンル」として定着しています。本展の出発点は、この現象の源流にある、近代日本におけるイギリスのスリップウェアの受容と展開を見つめることにありました。

本展では、当館所蔵作品約50点(初公開の新収蔵作品を含む)をベースに、スリップウェアに魅了された国内外の作家を紹介しています。20世紀初頭、楽焼への関心からスリップウェアの製法に到達し、あるべき陶器の姿(理念)としてスリップウェアを捉えた世代、彼らに学び創作的表現としてスリップウェアに取り組んだ次世代の作家たちの作品を展示しています。同時に、イギリスの近代的なスリップウェアにも焦点を当てるとともに、益子の近現代陶芸を「スリップウェア」という観点から捉え直しています。会場では明確な章立ては設けていませんが、以下、本展の趣旨と見どころについて概観します。

楽焼からスリップウェアへ



近代日本において、イギリスの伝統的なスリップウェアに最初に美を見出したのは、のちに民藝運動を創始する哲学者・柳宗悦(1889～1961)と、陶芸家となる富本憲吉(1886～1963)とされています。1913年、柳と富本はそれぞれ、東京日本橋の丸善でイギリスの伝統的なスリップウェアやトフトウェア(緻密な図柄で構成された銘入り鑑賞用スリップウェアで、著名な陶工トーマス・トフトの名前にちなむが、複数の一族により制作されている)を紹介した大型の洋書、チャールズ・ロマックス著『Quaint Old English Pottery(風変わりな英国古陶)』(1909年)(＝左写真／本展では展示していません)を入手しました。

『Quaint Old English Pottery』表紙(濱田庄司記念益子参考館蔵)

富本を介して本書の内容を知ったバーナード・リーチは自らスリップウェアを研究し、1910年代から20年代初頭にかけて筒描で絵付けした楽焼により再現を試みています。本展で紹介している当館新収蔵のリーチ作《楽焼飾皿》(1920年)は、東京麻布の黒田清輝邸内に設けられた窯場で制作したと推測される優品で、縁には「ISLANDS OF ENCHANTMENT」(魅惑の島)と「BERNARD LEACH」という文字、見込みには繊細なタッチで大型船の絵が描かれています。式場隆三郎著『バーナード・リーチ』にカラーで掲載されている作品の類例で、大変希少な作品です。その後、1920年にイギリスのセント・アイヴスに渡ったリーチと濱田庄司により、いわゆるトフトウェアとは異質の、無名の陶工による縞模様のスリップウェアの存在と、器の表面に泥漿を掛けて模様を描き出す手法が明らかになります。1924年に濱田庄司がイギリスから持ち帰ったスリップウェアの大皿を見て、京都の陶芸家・河井寛次郎(1890～1966)も早速試作し、花文や双手の模様を化粧土の流し掛けと筒描により巧みに表現しています。また濱田の見聞は柳の文章を通じて広く紹介されて浸透していき、今日の日本におけるスリップウェアの一般的なイメージとして定着していきました。

濱田や河井による英国風のスリップウェアは、民藝運動の始まりと前後して集中的に作られています。ただ、彼らは西洋のスリップウェアに新たな価値を見出しましたが、その模倣自体には主眼を置いていませんでした。むしろ、スリップウェアは民藝の理念を体現したうつつのあり方として内在化され、濱田の流し掛けの仕事や河井の筒描の仕事の中に息づいていきます。本展では、あえて彼らの後半期の作品を並置させてみせており、そのことを実感していただけるのではないかと思います。創作的な表現としてのスリップウェアは、むしろ河井や濱田を師と仰いだ次世代において開花していきます。

日本におけるスリップウェアの開花

今日の陶芸界では様々なスリップウェアの作家が活躍し、各々に個性を発揮していますが、本展では、いわばその先駆的なスリップウェアの名手として、主に4名の陶芸家をとりあげています。

島根県松江で代々続く布志名焼の窯元に生まれた船木研兒(1927～2015)は、バーナード・リーチの勧めで渡英し、長男デイヴィッド・リーチの工房で作陶経験をえました。イギリスの古陶に魅了された船木は、帰国後、トフトウェアに触発された、生来の画才を発揮した遊び心のある飾皿を手がけています。

武内晴二郎(1921～1979)は武内潔真の長男として岡山に生まれました。戦傷を受けて左腕を失いますが、1946年、倉敷羽島窯の創設時にスリップウェアの試作を始めました。この時期に濱田庄司や河井寛次郎のもとを訪ねています。スリップ以外にも象嵌や練上などで味わい深い作品を残しました。

当館では初めての紹介となる藤井佐知(1924～2015)は兵庫県淡路島出身で、女子美術大学洋画部を卒業後、1951年から濱田庄司のもとで修業しました(濱田の弟子中、ただ一人の女性とされています)。淡路島の南西端に窯を構え、淡陶タイル用の土を用いて皿や水差など一貫してスリップウェアを作り続けました。

兵庫県丹波立杭の窯元に生まれた市野茂良(1942～2011)は、バーナードの妻ジャネット・リーチが丹窓窯で滞在したことが縁で、1960年代終わりにイギリスのリーチ・ポタリーで作陶しています。ただし当時のリーチ・ポタリーではスリップウェアよりも炆器の制作が中心となっており、市野のスリップにはむしろ古丹波からの流れがみられますが、同時に現代的な感覚や英国体験が生きた作風にもなっています。



市野茂良《飴釉スリップ文大皿》2006年
益子陶芸美術館蔵

伝統と復興 — イギリスのスリップウェア



E.B.フィッシュリー 《緑釉花器》1900年頃
益子陶芸美術館蔵

一方で、本国イギリスでは社会や生活様式が近代化していく中で、まさしく濱田やリーチが出合ったようなスリップウェアは衰退しつつありましたが、新たな文脈で価値が見出され、現在では多数の個人作家が多種多様にスリップウェアを制作しています。作家については枚挙にいとまがありませんが、本展では、当館のコレクションの中から選んで展示しています。

イギリスのデヴォン州北部、粘土の産地としても知られるフレミントンにて代々続く窯を引き継いだ陶工、E. B. フィッシュリー (Edwin Beer Fishley, 1832～c.1912) は、黄釉に掻き落としで絵柄を施した同地の伝統的な水差などを作っていましたが、次第に緑釉やコバルト釉を使った作品を手がけていきます。1921年、濱田庄司がイギリスのディッチリングでフィッシュリーの作った緑色のスリップウェアに出合って感銘を受けているというエピソードが知られています。イギリスの伝統的なスリップウェア復興の立役者とされるのはマイケル・カーデュー (Michael Cardew, 1901～1983) です。

1923年にバーナード・リーチの一番弟子となり、濱田庄司やイギリスの伝統的なスリップウェアに大きな影響を受けました。1926年からはグロスター州 ウィンチコム・ポタリーで独立し、1930年代にかけてレイ・フィンチ (Ray Finch, 1914～2012) やシドニー・タスティン (Sidney Tustin, 1913～2005) らとともに同工房でスリップウェアを手がけています。

現在のイギリス陶芸界におけるスリップウェアの最も代表的な作家としてクライヴ・ボウエン (Clive Bowen, 1943～) が活躍しています。ウェールズのカーディフで生まれ、1971年よりデヴォン州北部シェビアで作陶を続けています。地元フレミントンの赤土を用い、英国の伝統的なスリップウェアを本格的に復興させました。スリップを掛け流す流麗な手さばきと類稀な造形感覚が生きた、完成度の高いスリップウェアで、国内外で高く評価されています。

スリップウェアと益子



濱田庄司はイギリスから帰国後、1930年に正式に益子を拠点と定めますが、益子で制作した作品の中には、表面に羽状文を施した器など、英国のスリップウェアの技法を彷彿とさせる作例が残っています。濱田庄司が持ち込んだ英国のスリップウェアや作風は、直接的にも間接的にも益子の個人作家たちに影響を与えています。木村一郎 (1915～1978) は筒描による絵柄を施した皿や、黄釉を駆使した瀟洒な作品を残しました。小滝悦郎 (1933～1997) はスリップの縞模様を平面的な皿ではなく徳利型の瓶に施すなど創意をみせています。釉の調子が肝心とされる益子の焼物は、本質的に、スリップウェアの風合いと親和性が高いことが窺えます。

木村一郎 《黄釉瓶》1961年 益子陶芸美術館蔵

おわりに

本展は小規模な展示ではありますが、日英のスリッウェアをお楽しみいただけるとともに、当館のコレクションの特徴を感じていただけるラインナップになっています。本誌の読者の皆様におかれましては遠方のことと思いますが、まもなく新緑の季節を迎え、閑静な益子の町中も春の陶器市でにぎわいます。あわせてお出かけください。

「楽焼とスリッウェア」展

会期 2019年3月2日(土)～5月6日(月・休)

会場 益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子(栃木県芳賀郡益子町益子 3021)

休館 月曜(春の陶器市期間:4月27日(土)～5月6日(月・休)は無休)

料金 一般 600(550)円 65歳以上 300円(要証明) *()内は20名以上の団体

お問合せ 電話 0285-72-7555 HP <http://www.mashiko-museum.jp>